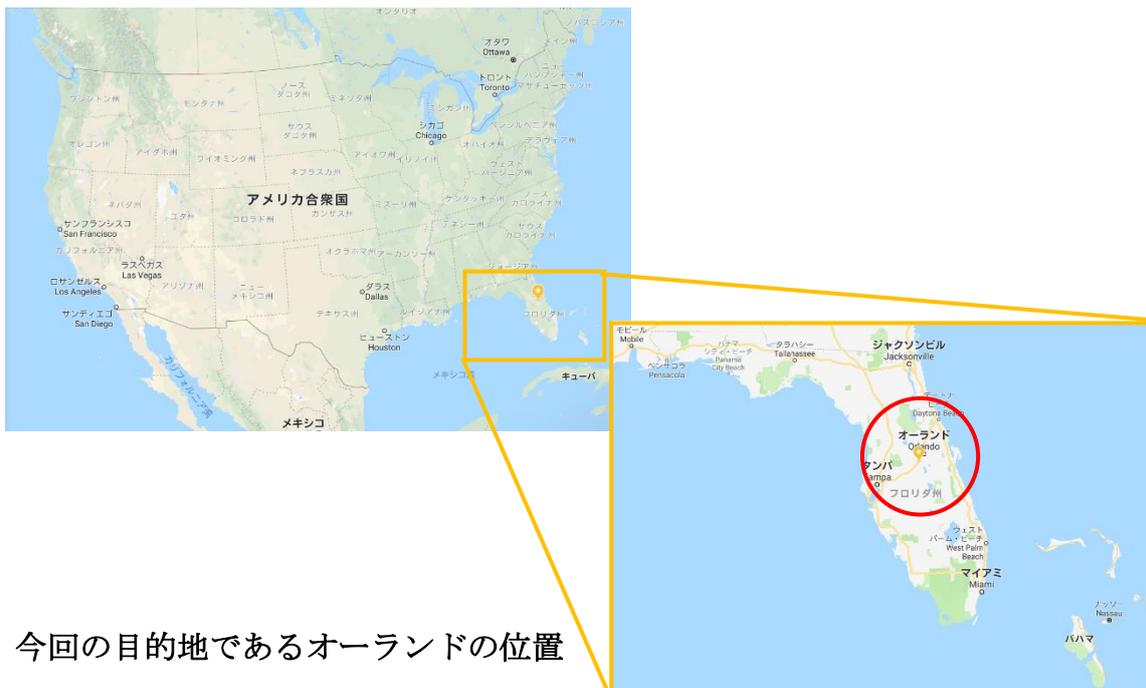


## 1、はじめに

「アメリカの原子力学会に参加してみないか」と指導教官である千葉豪准教授から最初にお声をかけていただいたのはいつのことだっただろうか。筆者の記憶が正しければ、それは2月のはじめ、山手線の車内でのことだったように思う。「是非ともアメリカに行きたい」そんな欲望に正直な気持ちを内に秘め、しかし中国・韓国と二度も海外に同行させていただいている身で、それを望んで良いのだろうかと逡巡した記憶が確かにある。しかし、そんな真冬の記憶から一転、気が付けば私は初夏の日差しの中で就職活動に東奔西走(南奔南走しかしていないが)しつつANSの論文と原子力学会秋の年会の予稿へ同時に手を付けるという無謀な取り組みに直面していた――。

――と、他の報告書を読んでくださった方にはお馴染みの長い前置きと表題からも分かる通り、拙文はANS(米国原子力学会)のWinter meeting 2018に口頭発表にて参加した際の詳細や、得たこと感じたことなどをまとめた報告書である。自身にとって二度目の国際会議であり、ある程度の勝手が分かっている以上、多少は余裕のある準備となると考えていたのだが、論文提出の段階で結果が出揃っていないなど結局直前に右往左往してしまったことは大いに反省すべき点だろう。そういった点も含め、本報告書では主にANS自体について、自身の発表に関して、そして原子力学会に限らず全体を通して見たアメリカ合衆国そのものの印象について触れていく次第である。



## 2、ANS Winter meeting 2018

さて、ANS とは何か。わざわざ文を割くほどのものではないが、ANS とは American Nuclear Society を訳して字の如く米国原子力学会のことであり、1954年に国内外の原子力科学と技術利用の推進を目的として設立した非営利団体である。ちなみに前年の1953年は当時の米国大統領であったアイゼンハワーが『平和のための原子力』演説を国連総会で行った年であり、この宣言が、アメリカの原子力への姿勢がANS設立への大きなきっかけとなったことは想像に難くない。



会場から少し離れたオールドタウンの街並み

そして現代、ANS では今でも『原子力技術の平和利用』を掲げ続け、40 か国以上 11000 人のメンバーが所属し活動を行っている。

そんな ANS の主催する Winter Meeting は年に二回行われる National meeting(全国大会)のうち的一方で、2018 年度は 11 月 11 日～15 日の 5 日間を通しリゾート地として名高いフロリダ州オーランドにて行われた。本会議のテーマは『*Joining Forces to Advance Nuclear*』となっており、原子力の革新に向けて協力していくとの言葉通り

TOFE(Technology Of Fusion Energy/核融合技術), ATH(Advances in Thermal Hydronics/熱水力), ANTPC(Advances in Nuclear Nonproliferation Technology and Policy Conference/核不拡散と政策)の 3 つの会議と合同で行われ、新技術等を展示する Technology Expo も催された (ついでにこの『*Joining Forces to Advance Nuclear*』だが、google 等の翻訳機能では『前進する核兵器に参加する』だの『核兵器を推進するために参加する』だの物騒な訳ばかりになる)。

## 3、往路

渡米する際の参考になるのではないかと、一度は仔細に渡って書き綴ったのだが、少々文量が膨らんでしまったため報告書としては省略させていただく (興味をお持ちの方は本書末尾に付録として添付したのでそちらを読んでいただきたい)。

非常に簡潔ではあるが、参考までに旅程を記載しておく。レセプションの前日となる 11 月 10 日に北海道を出立した我々は、羽田国際空港、トロントピアソン国際空港を経由し、およそ丸一日をかけて(トランジットの待機を考えれば 24 時間以上)目的地となるオーランド国際空港へと辿りついた。RPHA の際には言語の壁からタクシーの利用に多少の難があったが、今回はそういったこともなく無事にオーランドのオールドタウンに面したコンドミニアムへと腰を落ち着けた次第である。

始終(不調に)腹を抱えた同行者の件は彼の報告書に、機内食のレポートとトランジットの際いかに時間を持て余していたかについては巻末の付録を参照していただきたい。

#### 4、Reception & Opening Plenary

気分は夜中であるにも関わらず、カーテンから差し込む容赦のない光に叩き起こされ、オーランド滞在の二日目開幕を開けた。時刻は昼すぎ、学会会場では既に人脈を広げるための催しが始まっていたが、身体の調整を優先し、隣接するオールドタウンへと向かう学生二名。街を散策するうちに、低緯度の日差しと遊興地域らしい喧騒、そして何より昼食の **Sushi** と **Udon** に対する



散策したオールドタウンの街並み

衝撃のおかげで、会場に向かう程度の元気を取り戻すに至った。そうして部屋を後にした我々は、車社会を舐め切っていたが故の紆余曲折を経て、無事に会場である **Hilton Orlando Bonnet Creek** へと到着したのであった。

と、いうことで本節では学会の始まりとして欠かせない **Reception** と **Opening Plenary** について触れていく。今回の **Reception** は **Technology Expo** の会場と併設で行われていたが、初日ということもあり眺めるに留まったため、**Expo** の詳細は次節で触れることとする。

ホテル到着ののち **iPad** を用いた簡素なレジストレーションを終えた我々は、ぞろぞろと列を為して **Reception** の会場へと足を踏み入れた。早速両側に広がる **Expo** の展示へと目を向けると、そこにはグラスを片手に歓談する参加者の姿が。それらに興味は抱きつつも話しかけるには至らないまま、人の流れに沿って **Reception** の開場へとたどり着いた。そこには写真の通り多くの参加者が食事に会話に盛り上がっていたが、



レセプション会場の様子

どうやら彼らはみな知己同士らしい。そこに混ざりこむだけの話題も、語学力もない私はひとまず食事を楽しむ方向に頭を切り替え、ピザやローストチキン、ポテトなどいかにも”アメリカ”ですと言わんばかりの食事を胃に詰め込むこととした。次第にドリンクチケットを利用してお酒を嗜む余裕もでき、そろそろ会話でも……といきたいところではあったが、歳の近い学生もあまり見当たらず、せいぜい北海道大学に友人がいる方に声を掛けられる程度となり、結局そのまま少し早めに会場を後にすることとなった。

翌朝、まだわずかに時差で鈍る頭を叩き起こし、昨夜東北大学の方にお勧めしていただいた **Uber** をおっかなびっくり利用しつつ学会初日となる会場へ向かった。到着するや否や気を引き締める意味も込めて **Opening Plenary** を聴講に向かったわけだが、そこで早速国歌を聴きながら起立する状況となり、目を白黒させたのが記憶に残っている。と、そんな

アメリカ体験はさておき、開会の挨拶では、先にも述べた三分野での協働の話や、現在主流となりつつある SMR の話、箸休めのように置かれたオーランドでの遊興、そして、教育についてなど、広い範囲にわたって言及された。挨拶ののちに ANS Fellow の紹介が行われ、4 名の話者による Plenary Session に先立って座長である Daniel L. Churchman (Southern Nuclear Corporation) からアメリカにおける原子力の歴史や研究、取り組みについての発表があった。スリーマイルやチェルノブイリ、福島以降も運転している原子力発電所が増加していること、アメリカの原子力リネサンスについて、またその継続には政治、経済、産業ともに挑戦を続けるべきであることなどが印象に残った。とりわけ、計画の遅れがコストの増加を招く話や、多くの関係者の協働を強く推していく姿勢など、日本で聞くのとは少し違った印象を受け、ある意味でアメリカらしさを感じる発表であった。続く一人目の発表は Tom Bergman (Vice President Reg Affairs, NuScale) によるもので、

NuScale 社と外部の共同研究や開発に関する紹介が主だで行われた。70 以上の団体と、2500 万ドル以上をかけて取り組んでいることから、その真剣さが見てとれる。また、完了している研究も紹介され、再エネから MOX 燃料の開発まで様々な分野で実際に使われている様子が紹介された。といった調子で全員に触れても間延びすること間違いなしなので、省略させていただく。

最後となる 4 人目の発表は Sama Bilbao y Leon (Head of Nuclear Technology Development and Economics – Nuclear Energy Agency) による電力市場や政治に関する発表であった。第一に NEA が『政府が国際的な課題に挑戦する際にそれを補助するためのフォーラム』であるとし、その加盟国が原子力の平和利用のために必要な科学的、技術的、法的な基盤を国際協力によって維持・発展させるための機関だとその立ち位置を紹介した。筆者自身、幾度も会話で OECD-NEA の名前は耳にしてはいたものの、実はその明確な設立目的を知ったのはこの時が初めてであった。その後もしばらくは組織についての説明がなされ(組織構成など) 続いて世界的な市場の話となった。要約してしまえば、電力がエネルギー市場でも重要な位置を占めることや、原子力が再エネや天然ガスに比べ競争力を持っていることなど経済的な位置から見た原子力の優位性、Grid コストについてみた場合、再エネのコストは非常に高いため、VRG (Variable Renewable Generation) を含むエネルギー供給源は結局総合コストが高くなるといった、原子力開発の重要性をひたすらに推薦する内容であった。おそらくはそれを踏まえて政策のオプションを考えてほしい等だったのかもしれないが、英語力の不足から正確な話は分からなかった。とにもかくにも、技術的、政治的、様々なアプローチで現在の原子力事情に触れて、無事オープニングプレナリーは終わりを告げたのであった。



Opening Plenary の様子

最後となる 4 人目の発表は Sama Bilbao y Leon (Head of Nuclear Technology Development and Economics – Nuclear Energy Agency) による電力市場や政治に関する発表であった。第一に NEA が『政府が国際的な課題に挑戦する際にそれを補助するためのフォーラム』であるとし、その加盟国が原子力の平和利用のために必要な科学的、技術的、法的な基盤を国際協力によって維持・発展させるための機関だとその立ち位置を紹介した。筆者自身、幾度も会話で OECD-NEA の名前は耳にしてはいたものの、実はその明確な設立目的を知ったのはこの時が初めてであった。その後もしばらくは組織についての説明がなされ(組織構成など) 続いて世界的な市場の話となった。要約してしまえば、電力がエネルギー市場でも重要な位置を占めることや、原子力が再エネや天然ガスに比べ競争力を持っていることなど経済的な位置から見た原子力の優位性、Grid コストについてみた場合、再エネのコストは非常に高いため、VRG (Variable Renewable Generation) を含むエネルギー供給源は結局総合コストが高くなるといった、原子力開発の重要性をひたすらに推薦する内容であった。おそらくはそれを踏まえて政策のオプションを考えてほしい等だったのかもしれないが、英語力の不足から正確な話は分からなかった。とにもかくにも、技術的、政治的、様々なアプローチで現在の原子力事情に触れて、無事オープニングプレナリーは終わりを告げたのであった。



## 6、Technical Sessions①

昼食である紙袋に入ったサンドイッチを平らげたのち、各自興味のあるセッションを回ることとなった。私は特に自分の専門と近い分野の発表も見当たらなかったのので、他の四人と別れ、第4世代、革新的原子炉のセッションを訪れた。一件目の発表は Westing House の小型原子炉の紹介で、立ち見が出るほどの盛況さからその注目度が伺える。どうやら、トラックで搬入可能レベルのサイズの小型原子炉(プラント?)を今後商用として試験を行うらしく、マイクログリッドやスマートグリッドといった世の流れを肌で感じる事ができた。その後、人が多少減りはしたものの聴講者数は多いま次の発表へと移った。続いてもなかなか興味深いことに、電気を貯めておくよりも、熱を貯めておく方が安価であるという考えに基づいて、液体ナトリウムを用いた熱貯蔵について太陽光などを例に比較を行っていた。そして、この発表は移り行く市場の中で熱貯蓄が重要であることを強調して終わった。ついでに、発表中に隣に座っていた男性に無言で葉巻を差し出された事件は、熱貯蔵という考え方の流れを知ったことと同程度に衝撃的であった。

以上のように学会初日となる12日は様々な発表を聴講し、一日を終え、宿泊場所から徒歩圏内にあるバーガーキングで夕食を済ませた。同行した K 君共に両者とも日本でバーガーキングを利用したことはなかったため比較はできないが、ワッパーの大きさやドリンクの二度見するだけの巨大さには驚きつつ、アメリカを感じていた。

## 7、Technical Sessions② (発表本番)

そして発表当日となる学会4日目。この日は自身が特に気になっていた——より率直に言えば発表したいと思っていた『不確かさ評価&感度解析』の発表数件を聴講し、名大の野中君の発表を(改めて自分の発表に向けての心構えという意味も込めて)見学、そして自身の発表という流れで各会場に足を運んでいた。また、その日の終わりに名大北大合わせて5人の悪戦苦闘健闘を労い、アメリカを肌と胃袋で感じさせるべく山本章夫教授に700gものTボーンステーキをご馳走いただいた件はK君の報告書にもある通りである。先生が目論見通りというべきか、食事一つにしては十分すぎる経験をさせていただいたということで本当に感謝の念に堪えない次第である。ご馳走様でした。

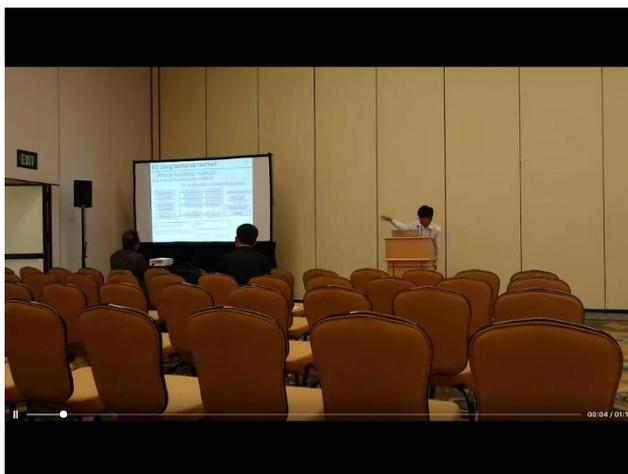
さて、時は遡って学会4日目午前。開始時刻間際の到着ということもあり、足早に向かった不確かさ解析のセッション会場は、想定以上に賑わっていた。生憎一件目の発表は途中からということもあり内容を追いきることができなかったが、活発な質疑応答の様子を見て午後の自分の発表に期待を抱いていたのを今でも覚えてい。のちに裏切られるわけだ



Sessionの様子① 盛況である

が。続く二件目はナトリウム冷却の高速炉について SCALE を用いた際の不確かさ評価ということで、入力核データの不確かさを考慮する必要性が述べられた。特に高速領域で断面積の不確かさが大きくなる核種が多く存在するらしく、ピンセルモデルから集合体計算まで、増倍率にどの程度の不確かさが生じるか検討を行っていた。Preliminary Results ということで、最終的な結論が述べられることはなかったが、発表の根本にある高速領域の不確かさ評価の話は少々気になる話ではあったし、総じて興味深い発表であった。この発表に関しても非常に活発な、フランクな雰囲気での質疑が行われていたが、それ故に英語が早く内容を聴き取れなかったのは無念である。そして、途中退室を惜しみつつも知人の健闘を見学するべく、炉物理一般のセッションへと会場を移動した。向かった先で、時折神の声に天啓を得ながらも、戸惑うことなく発表を終える同郷の彼には非常に気力を分けてもらえた気がする。その後、ホテルの売店で仕入れたサンドイッチを腹に詰め込み、滞在二日目にして紛失したカメラを回収することに成功した午後、遂に発表の時間が迫ってきた。

私の発表セッションは炉物理一般のIV、基本的には核計算を取り扱う発表が多いため不確かさ評価に関する発表は私のもののみとなってしまった。しかし、問題はそこではなく、開始時刻が迫っても一分一厘すら埋まらない会場の座席にあった。聴講者はまさかの10名前後、昼前の不確かさ評価&感度解析セッションは空腹を目前に見た白昼夢だったのだろうか。などと、微妙に現実から逃避しつつも、先日韓国へ訪ねた際に交流のあった UNIST の学生と挨拶を交わし、自身の番を待った。今回の私の発表は『ランダムサンプリング法を用いた不確かさ評価における分散低減手法としてのリバースサンプリング法の提案』端的に言ってしまえば、時間はかかるが正確性の高い評価手法を高速化できないか、という発表であった。たどたどしい英語でどうか要点を伝え、使用のためのガイドラインのようなものはあるのか、手法の詳細といった基本的な質疑を行い私の発表は終了となった。少々の不完全燃焼をかかえつつも、私の肩の荷はこれで無事に降りたわけである。のちは気楽に旅の道連れであった K 君の発表を記録に向かい、学会終了後は先ほども述べたように肉を堪能させていただき、すべての行程が終了した。



Sessionの様子② 人が、いない？

## 8、American Culture (余談)

以上が、私の生涯2度目であり、学生生活最後となる国際会議参加記録である。

であるのだが、ここはフロリダであり、半島の中央に位置するオーランド。ディズニーやユニバーサルスタジオ、アクアパークといった、14時間進んだ世界に生きている日本人にすら聞いたことのあるアクティビティが四方に散らばる一大観光地である。この節では、誘惑に負け好機を逃すことなく、オーランドを五感で感じそしてアメリカに抱いた素直な想いを少しでも吐き出す場とさせていただく。

さて、そういったわけで学問を疎かにせず最大限機会を有効活用すべく協議を重ねた我々は、狙いを『ケネディ宇宙センター』と『ディズニーワールド』の2点に絞った。一方はアメリカの精神を色濃く示す宇宙開発、もう一方はアメリカンドリーム——ウォルト・ディズニーが夢に描きそれを具現



ケネディ宇宙センターにて『アトラスV』

化したアミューズメントパーク。その詳細は付録として末尾に添付させてもらったが、そのどちらもアメリカ人の気質を感じるには十分すぎるほどの体験であった。ディズニーで知ることができたアメリカの歴史と、今を生きるアメリカ人の自国への誇り、ケネディで想いを馳せた宇宙への想いと国が一丸となって「前へ前へ」と歩み続けるそのフロンティア精神。他国と比較してどちらが優れているかなどと無粋なことを考えるつもりは毛頭ないが、アメリカが世界の警察と呼ばれるほどの大国まで成長できた理由の一端を知ることができたと思う。

ただし、食事に関しては口を嚙まざるを得ない。ステーキとハンバーガーは美味であったが、食文化に関しては日本・中国の圧勝である。州ごとに特色があるため、フロリダだけで判断するのは早計かもしれないが、日本の国土の狭さに対する食のバリエーションと比べれば想像に難くない。



ハンバーガーと巨大なサラダ

ともあれ、学会の Plenary Sessions でも感じてはいたが、なおさらアメリカの巨大さ、力強さを実感するに至ったわけである。

## 9、最後に

最後に、これが本当に最後である。おそらく次の報告書をホームページに掲載することはもうないのだろう。言ってしまうえば本報告書と本渡米はある意味で集大成だったわけであるが、やはり後悔というものは残る。それは例えば英語力不足であったり、より建設的な質疑応答ができなかったことだったり、日本人との交流しかできなかったことだったり。数えだせばキリがない（というか主に英語力）。しかし、けれど、それでも、去年の晩夏、中国で発表したときに比べれば遥に多くの成果を得た。発表も、質疑も、そしてとりわけ聴講でも。少しずつでも前に進んでいるのであれば、それは間違いなく去年の後悔のおかげである。『我々は星へと向かう際、時として力及ばず道半ばで果てることがある。しかし我々はその痛みを乗り越え、さらに先へと進まなければならない』とチャレンジャー号の事故ののち、レーガン大統領は述べた。ここまで大仰なことを言うつもりはないが、そんな後悔たちを乗り越えてここにいるのだと、そう実感する渡米だったように思う……と、少し格好つけてみたが、研究も学生生活もまだ少し続く。今回の ANS 参加で思ったこと、抱いた悔いを少しでも多く乗り越えられるよう残りの学生生活を過ごしていきたい。

滞在中（特に精神的支柱として）お世話になった名古屋大学の皆さん、世話と肉を焼いてくださった山本先生、それと 1 週間旅を共にしてくれた K 君、ありがとうございました。

## 10、付録

### ①太平洋横断記 (完全版)

そもそも極域を通過する航路をとるため、太平洋を横断しているわけではないのだが、特に良い題が浮かばなかったためご容赦いただきたい。付録の①にあたる本文は、自宅を出立してから開催地オーランドに至るまでの道のりを振り返るものであり、これを読んだ方が米国へ足を延ばす際の一助となれば幸いである。

さて、出発当日は11月10日。札幌では既に本州の冬程度に冷え込む日もあるものの、常夏の州フロリダということでコートは自宅で留守番である。駅までは凍えるものかと不安に思っていたのだが、幸いなことに当日の札幌は快晴。気温も穏やかということで、寒さに震えることもなく幸先の良い旅立ちとなった（のちに常夏のフロリダに裏切られることとなるのだが、それはディズニーの節で）。今回のオーランド行きの旅程であるが、羽田発着ホテル&飛行機のみのパックツアーを利用しており、全便エアカナダ、往復ともにトロントピアソン国際空港を経由しての道程である。そういった事情も手伝い、出発時刻の6時間前に羽田空港に到着した筆者は、そこで今回当研究室から唯一の同行者であるK君と合流した。手始めに食した日本最後の食事となる天井と、それを皮切りに続く彼の悲劇については同ページにあるリンクからもう一方の報告書を読んでもらうとよくわかるだろう（全体を通して拙著より臨場感あふれる報告書となっているのでぜひ一読いただくことを推奨する）。

閑話休題。羽田空港国際線ターミナルにて、最低限の両替と小物の購入を済ませたのちは、ずんだシェイクを片手にひたすら暇を持て余す時間が続いた。この時間に機内でいかにフライト中の時間を有効活用するか頭を悩ませていたのだが、特に妙案は浮かばず結局は電子書籍をなるべく多く確保しておくのみに留まった。

そうして首を長くして待ったのち、ある程度時間を要するだろうと”期待して”出国手続きに向かったのだが、技術の進歩がもたらす効率化の波にあふれずどうやら出国手続きも革新的な変化を迎えていたようで、10分も経たないうちに我々の身はセキュリティエリアの中にあった。具体的には、パスポートと本人との顔認証を自動で行うシステムが用意されており、人間の手を介さず出国手続きを終えてしまったといった次第である。わざわざここに一段落分の長文を用意する程度には驚きが隠せずにいた。

続くセキュリティエリア内でも長い暇を潰し、ようやく搭乗の運びとなる。隣席の彼がお腹に爆弾を抱えていたことは前述の通りであるが、そんな苦しみを尻目に私自身はきちんと三食機内食を満喫していたこともあり、少々の罪悪感を覚えていたような記憶がある。特に、鶏肉のメープル煮のような夕食が特に美味であったこと、また機内に充満するインスタント麺の香りに目を覚まし、図々しくもCAの方に慌てて自分の分の夜食を要求したような記憶が強く……あまり搭乗前に懸念していたような退屈を覚えていないことから、食の偉大さを嘔みしめるばかりである。

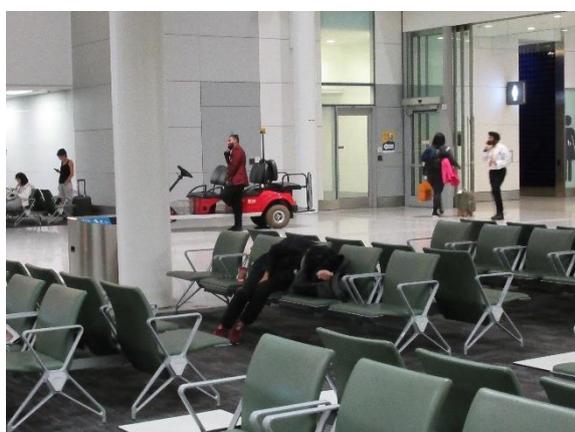
13時間のフライトを経てトロントへと到着したのは11月10日の17時ころ、羽田を出立したのが19時過ぎだったのでおよそ2時間のタイムスリップとなった。一度寝て目覚めたにも関わらず夕暮れのままである空を見ての第一声は「寒い」であった。それもそのはず、トロントは北緯43度と北海道の旭川市と同程度であり常夏のフロリダを目指す我々にとってはあまりにも極域に近すぎる……と、暖房の聞いた空港内で3時間を潰すだけの身には大した問題ではない話ではあったが。そんな話はさておき、米国への入国手続きをカナダで済ました我々は再びセキュリティエリア内で時間を持て余すこととなる。米国乗り継ぎ用の限られた空間ということもあり、売店をいくらか物色したのちに北米大陸上陸後の食事としてファーストフードのバーガーを食すのだが、語学力が未だ暖気し切れておらず注文と違うものが出てきてしまったのは悔やむべき点である。私はワッフルサンドが食べたかったのだ、などと思ってもいない後悔に触れてるうちに、飛行機は30分の遅れをもって離陸し、60分の遅れでオーランド国際空港へと着陸した。空港でいきなりロストバゲージならぬロストスーツケースベルトという微小なトラブルを迎えはしたものの（損害額は1200円くらい）、タクシーも乗り場のおっちゃんに頼むことで難なく確保でき、中国の時のような不安もなく無事に宿泊場所へと到着することができた。

せっかくなので宿泊地についても触れるが、今回泊まったホテルは **Celebration Suites at Old Town** (セレブレーションスイーツまでが宿泊所名?) というオーランドのオールドタウン横に位置するコンドミニウムである。日本ではあまり目にしないが（自分が行かないだけかもしれない）いかにも長期滞在を前提とした海外らしい部屋の造りで（そもそもそれがコンドミニウムであるが）、非常に居心地がよく5日間の滞在場所としては中々満足のいく選択であった。ただ、アメリカの食については後程触れるが、キッチンがあるのに近所のスーパーに食材が置いていないのは如何ともし難い。

ともあれ、これで無事に学会に参加する拠点が整ったわけである。



機内食一食目『鶏肉のメープルなんとか』



トロント空港で寝る無防備な日本人(体調不良)

## ②宙にいちばん近い場所～ケネディ宇宙センター～

Coming soon

## ③過去と未来と世界中～ディズニーワールド/Epcot～

Coming soon

## ④本文に載せるには蛇足だが、記憶に残ったネタ集（没ネタ集）

本節はアメリカを実感するに足る、もしくは非常に心に残る出来事ではあるものの、どう本文に差し込んでも蛇足にしかなりえない、そんな話題を掌編のように羅列したものである。タイトルを眺めて気になったものだけでもご一読いただくと幸いである。

### (4-1)コンドミニアム滞在記

Coming soon

### (4-2)途切れる歩道、消える人影 ～車社会の現実～

Coming soon

### (4-3)カメラを紛失した話

Coming soon

### (4-4)パン、肉、野菜、パンそしてポテト / アメリカの食

Coming soon